
スマブラメンバーを1つの町に凝縮中

ほーき雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スマブラメンバーを1つの町に凝縮中

【Nコード】

N2698Z

【作者名】

ほーき雲

【あらすじ】

五武山市、僕の小説の大半はここが舞台である。だったらスマブラメンバーをここに住ませてみたらどうだろうか？いちいち五武山市に来る必要はない。最初からいるのだから。（笑）

そんなテンションで始まったが・・・。

スマブラメンバーの他にもある魔術の禁書目録、塊魂のキャラクター、さらに一部オリキャラも登場します。

プロローグ（前書き）

予告編の続きです。見てない方は活動報告のアーカイブをご覧ください。

ブローグ

ある日、ほーき雲は立ち上がった。

ほーき雲「スマブラメンバー全員探すって絶対1人じゃきつい。しかも五武山市っていう広い場所に散らばっちゃってるんだもん。」

実は全員ほーき雲の近所にいるのだが・・・。

ほーき雲「誰かに救援要請しよう。」

マスターハンド「あれ？ほーき雲からメール？」

クレイジーハンド「ほーき雲からメール？」

D「ほーき雲からメール来たよ。」

『【救援要請】五武山市内に散らばったスマブラメンバーを全員僕の家の近くに集合させてください。僕1人じゃ足りません。よろしくお願いします。』

ちなみに、Dって何だ！？って思った人は大規模な逃走中にて詳細を知ることができます。

マスターハンド達「探すか！」

全員ほーき雲に協力するようになった。

みんなほーき雲の家から離れたところに行った時、スマブラメンバーは……。

リンク「みんなどうする？」

リユカ「家でゲームやる！」

ルイージ「4人1組になって分かれよう！」

全員「賛成！」

こいつらが家にいる限り、ほーき雲達はスマブラメンバーを1人も見つけられないだろう。

続く

ミサカ搜索隊（前書き）

どうなると思いますか？

ミサカ搜索隊

ほーき雲はスマブラメンバーを探す途中、ある少女に出会った。

ほーき雲「ちょっと打ち止めちゃん。人探しに協力してくれない？
スマブラメンバーを探しているんだけどね。この五武山市のどこに
いるのかわからないんだ。そこで君を含めた9970人でスマブラ
メンバー達を探して欲しいんだ。」

打ち止め「それじゃ、シスターズ全妹達に指示してみる。ってミサカはミサカ
は了解してみたり。」

その瞬間、いきなり9969人の人が現れた。しかも全員全く同じ
服装、全く同じ体型である。

シスターズ
妹達。

それはある電撃使いのクローン体である。200000+1体が造ら
れたが、そのうち10031体はある『最強の超能力者』によって
殺されている。

ちなみに、+1体というのは制御個体で、ほーき雲が出会った少女
のことである。

ほーき雲「これだけいれば全員見つかるだろう。」

打ち止め「でも、ミサカは行かないよ。ってミサカはミサカは自分
の参加だけは断ってみたり。」

ほーき雲「十分だよ。9969人もいるのはありがたい。さらに僕もいれてマスター達もいれて9973人。これで見つからなかったらヤバイよね。」

そして夕方。

ほーき雲「かなり疲れた……。見つかった？」

検体番号12345「すみません！見つけたのですが逃げられました。とミサカは失敗報告をします。」

ほーき雲「どこで見つけたの？」

検体番号12345「ちょうどこの家の隣ですよ。とミサカは報告します。」

ほーき雲「……。え？」

検体番号12345「ですから、この家の隣でマリオと思われる赤いおっさんを見つけました。とミサカは再度言います。」

ほーき雲「……。まさかみんなもうここに住んでるの？」

検体番号12345「その可能性が一番高いです。とミサカは脳内の計算により当然の答えを出します。」

ほーき雲は隣の家をノックしてみた。

マリオ「あつ、ほーき雲だ。ゲームしたいの？」

ほーき雲「・・・君達ここに住んでたのね。他の人達は？」

マリオ「みんなこの近くの家に住んでるよ。」

ほーき雲の力は抜けてしまった。その後、どうやって夕御飯を食べて、眠りについたのか覚えていなかった。

続く

ミサカ搜索隊（後書き）

いきなりスマブラ以外のキャラクター出しやがって・・・。

市長が死んだ。
(前書き)

いきなり何があったんだ!?

市長が死んだ。

翌日

ほーき雲「ああ、よく寝た。」

リンク「こっちはお前の家に連れていくの大変だったんだぞ。いきなり気絶しやがって。」

ほーき雲「すぐ隣だろうが。」

ヨッシー「そうそう、こちら辺に空き家いくつあるの?」

ほーき雲「50を越えてるって聞いた。」

ピット「だから1人1件でいいんだ。」

ほーき雲「とにかくたくさんあるんだよね。」

新聞社の人「号外!号外!大変なことになったぞ!」

ほーき雲「大変なことってなんだ!?!」

ほーき雲は号外新聞を1つもらう。

ほーき雲「なんだってえー!?!?!?!」

D「どうしたの？」

ほーき雲「市長が……死んだ。」

ほーき雲以外「なにいいいいー！！！！！」

ほーき雲「それでさ、新市長の立候補者がコイツ1人だけなんだけどね。」

ほーき雲以外「はああああー！！！！！！！！！」

ほーき雲「ね。ヤバイだろ。」

ネス「来たばかりなのになんでこうなるの？」

ほーき雲「知るかよ！しかも問題はここじゃねえ！」

スネーク「じゃあなんなんだよ！」

ほーき雲「五武山市民のほとんどがコイツを支持してるんだよ。」

ほーき雲以外「ヤベエエエエエー！！！！！！！！！！！」

ほーき雲「ほら、あつちで『ヤツ』が演説してるよ。」

ほーき雲以外「本気か……。」

続く

市長が死んだ。
(後書き)

立候補者は危ないやつらしい。

新市長大作戦（前書き）

誰なんだよ！？だいたいわかるかな？

新市長大作戦

ほーき雲「ほら、あれを見る。」

ほーき雲が見ているものは……。

タブー「これから私タブーが新市長となるのです！皆さんぜひ私に投票をお願い致します！」

ほーき雲「わかっただろ。大声でタブーが演説してるんだ。しかもあいつ以外に立候補者はいない。このままじゃタブーが新市長。となれば五武山市は終わるだろうな。」

リュカ「こんなのどうすりゃいいんだよ……。せつかく来たばかりなのに……。」

ほーき雲「方法なら1つある。他の誰かが立候補して選挙に勝つんだ！」

マスターハンド「しかし、それが難しいのは自分でもわかってるんだろ。今のタブーの支持率は最大。そこをどうやって勝つのか思い

付かないんだろ。普通そうだろ。誰が立候補するのかすら決めてないのにな。」

マスターの発言は最もである。しかし、それを否定するかのよう
に発言をした者がいた。

D「もし、僕を含めた昔の仲間たちの中で、『リーダーシップ界の王』と呼ばれる男が立候補したらどうなると思う？」

ほーき雲「そういうやつがいたら苦労しないよ。」

D「そういうやつは実際にいる。しかも遊び、仕事に関わらず最高のリーダーシップを見せる男。そいつが何回仕切っても誰も文句を言わない。しかもそいつの夢は政治家だ。市長になるのも第一歩になるはずだぜ。そいつの夢のため、タブーからこの五武山市を守るため、そいつを立候補させてみないか？」

全員「おおーーーーー!!」

ほーき雲「おい、1つ言っておくぞ。勝てるかわからないのはわかっているが、もし勝ったとしたら、タブーは攻撃するかもしれない。その時のために、選挙当日は戦闘態勢に入っとけよ。」

アイク「そこんとは大丈夫だぜ。なあみんな。」

アイク以外「おおーーーーー!!」

D「よし!その勢いだ。それじゃ、やつのところへ行きますか。」

続く

新市長大作戦（後書き）

果たしてどんなやつなのか？タブーが市長になることを止められるのか？

Ⅰ（前書き）

この小説は文字数の目安を400～700文字にしてるから毎日更新できそう。

T

D「おい。」

???「なんだ、Dじゃないか。」

D「お前、五武山市の市長になれるとしたらなりたい？」

???「そりやなりたいたさ。地方自治でもいいからやってみたいもんだな。ところで、たくさん人を連れてきたな。どうしたんだ？」

ほーき雲「突然市長が死んで、新市長立候補者がタブーっていう悪いやつしかいないんです。」

???「そりやいけねえ。僕が新市長立候補してやる。ちなみに、僕の名前はTだ。」

ほーき雲「T？Dに続いてTですか？」

T「そうだけど？」

ほーき雲「おいD。これはどういうことだ？お前の仲間はアルファベット1文字のやつしかいないのか？」

D「うーん。それが大半を占める。でもそれ以外もいることにはいる。」

ほーき雲「突然だけど例え話しようか。例えば、僕がマルスに腹が立ったとして。」

マルス「なんで俺なんだよ。」

ほーき雲「僕がマルスをボコボコにしたとする。この小説を読んでいる人にはマルスが好きな人が若干いることにはいるんだよ。」

マルス「なんで若干しかないんだよ。」

ほーき雲「だけど君はオリキャラだから君のことが好きなやつは超不人気マルスよりも少ないってことになるんだな。」

D「それがどうしたのかな？」

ほーき雲「つまりマルスよりも強力に痛めつけてもいいってことになるんだよ。」

D「なんで何気なく武器持つてるのかな？」

ほーき雲「僕だって武器くらい持つんだよ。さあどうする？」

D「そもそもなんでこんな目にあっているのかわからな……」

ドカーン！

Dは奇跡的に生きていた。

ほーき雲「もつとまともな名前のやつを友達にするように。別に今の仲間を見放せとは言わないから。」

D「また今度紹介します。」

何はともあれ、新キャラのTと共にタブーの新市長阻止作戦が始まった。

続く

Ｔ（後書き）

Dはいい人なんですよ。今回ひどい目にあっただけで。

みんなで作り上げる作戦

ほーき雲たちは選挙に向けて頑張っていた。立候補するのはＴだけだが、ほーき雲やスマブラメンバー達には絶対にＴを新市長にしなければならぬ理由があった。彼を市長にできなければタブーが市長になるのだ。

ほーき雲「僕達も協力してるし、Ｔも演説がんばっているし、なんとか新市長になれるかな。」

D「僕だってちょっとケガしてるけど、Ｔの直接的な友達としてしっかりフォローしていかなくちゃ。」

ほーき雲「よくちよつとのケガで済んだな。」

ほーき雲達は、Ｔが新市長になるために、タブーが新市長になるのを阻止するために、２つの思いを込めてポスターの貼り付けを始めとする手伝いをしている。

選挙前日

Ｔ「きつと大丈夫。みんな頑張ってくれたじゃないか。タブーがなんだ。あんなやつを市長にはしない。」

ピット「頼もしい。」

ほーき雲「なあ、みんな頑張ったもんな。タブーなんかに負けないよな。」

全員「おおー！ー！ー！ー！」

ほーき雲「あとは結果を残すのみだ！」

続く

みんなで作り上げる作戦（後書き）

次回は選挙本番。Ｔか？それともタブーか？

選挙中、役所前

ほーき雲達は五武山市役所に来ていた。・・・と言っても来ているのはほーき雲、D、Tの3人だけ。スマブラメンバーまで全員で来られたらすごいことになるからだ。

ほーき雲「次々と人が市役所を出入りしている。みんなで投票して
るんだね。」

D「あれ？タブーも来たぞ。」

タブー「おや？もしかして突然現れた2人目の立候補者とは君のこ
とかなほーき雲君。」

ほーき雲「僕じゃない。こいつだ。」

ほーき雲はTの腕をつかんで言った。

タブー「知らないやつだな。」

ほーき雲「お前、ポスターはちゃんと見る。市のあちこちにTって
書いてあるだろ。どこにほーき雲の名前があつた？言ってみな！」

タブー「こんなことで強気になりやがって。俺がそいつを知って無
かるうが、選挙で勝てばいいのだ。」

T「お前みたいなのは負ける気がしないな。協力ということを
知らなそうだ。」

タブー「何を言おうと俺の演説は大人気さ。このままだと俺勝つよ。勝って恥かかせちゃうよ。」

ほーき雲「やってみな！」

役人「これより投票を終了します。得票計算までしばらくお待ちください。」

ほーき雲「さあ、投票が終わった。あとは結果だけだぜ。」

続く

選挙中、役所前（後書き）

これ一応コメディーだね？本気でいがみあっちゃったりバトルしたり・・・。

5倍

役人「選挙結果が出ました！T氏がタブー氏の約5倍という差で勝ちました！」

全員「やったあああああああああああ————！！！！」

タブー「許せない・・・許せないぞ!!」

タブーが暴れたした。

ほーき雲「予想通り、とことん裏切らないね。スマブラメンバー達。今が腕のみせどころだぜ!」

スマブラメンバー一斉にタブーに突撃。

しかし、それで降参するタブーではない。必死で抵抗してくる。

フォックス「スマートボム！」

ルイージ「ファイアジャンプパンチ！」

あちこちから攻撃が飛んでくる。やはり人数では勝てないのだろう
か。

ネス「スマッシュボール！」

リュカ「スマッシュボール！」

ほーき雲「さあやっちまえ!!」

ネス・リユカ「PKスターストーム!!」

無数に降る青と黄色の隕石。それをタブーは何回も当たっていく。

タブー「絶対仕返ししてやる!!絶対だぞ!!」

タブーは一応去ってった。

全員「タブーを倒したぜ!!」

そしてタブーは

タブー「スマブラメンバーおのれ・・・。」

タブーの近くに白っぽい男が現れた。

タブー「あいつ殺せば少しはスーツとするかな・・・?」

タブーは白っぽい男に襲いかかる。

その瞬間の出来事だった。タブーが男に触れた瞬間、はねかえすような力が自分にかかっているのがわかった。

一方通行「なんだお前?」

タブー「お前こそ何者だ！」

一方通行「何者だだと？ならば問題です。学園都市最強のレベル5
といえは誰でしょうか？」

続く

5倍（後書き）

一方通行、読み方は『アクセラレータ』です。

一方通行（アクセラレータ）（前書き）

敗北したタブーのもとに現れた一方通行^{アクセラレータ}。どうなるでしょう？

一方通行（アクセラレータ）

アクセラレータ
一方通行「俺をナメンなよ三下ア！」

タブー「お前が何者かは知らないが、俺がここで退く訳ねえだろ！」

一方通行「ならばここで問題です。この俺、アクセラレータ一方通行は一体何をしているでしょうか？」

タブー「知るか！」

タブーは構わず一方通行に攻撃する。何発も何発も。撃ちまくるが、一方通行は全ての攻撃を自分に触れた瞬間にはねかえしている。

タブー「お前、反射してるのか？」

一方通行「残念。ちょっとおしいけど、俺のしていることとは違う。」

否定された。

一方通行「答えはベクトル変化。運動量、熱量、電気量。あらゆるベクトルに触れただけで変化できる。」

タブー「つまり、攻撃は当たらないって訳か。……ビーム系ならね！」

タブーは今度は一方通行に体当たりをしてきた。

一方通行「こりねエやつだなア。しょうがねエ。30倍で反射してやるよ！あばよ三下ア！！」

タブーが一方通行に触れた瞬間、タブーはすごい勢いで吹っ飛んだ。こうして、タブーを巡った五武山市の危機は無事ハッピーエンドを迎えたのだった。

その頃、ほーき雲の家は

ほーき雲「おっと、タブーが吹っ飛んでる。2度と来るなよ。さあ、明日から楽しい日常生活を送るぞ！絶対に空き家村とは言われないような愉快的な場所にしてやるぞ！」

続く

一方通行（アクセラレータ）（後書き）

次回は新しい章に入ります。

大騒ぎしても近所迷惑にならない

タブーがいなくなり、平和な五武山市。しかし、空き家村では大騒ぎが起こっていた。

ほーき雲「いいか？ここは空き家村だ。そこに僕達は住んでいる。つまり、この周辺には僕達しかいないことになる。それはどういうことか。答えは大騒ぎしても近所迷惑になりにくいってことなんだぜ！さあ、叫べ騒げの大盛り上がり大会を始めようぜ！！」

全員「おおーーーーー！！！！」

ほーき雲「まずは大食いゲーム！！ルールは簡単。カービィがヨッシー。どちらがより多く食べるかを賭ける！！ちなみに僕はカービィに賭けるよ！」

ゼルダ「私はヨッシーに賭ける。」

ネス「僕はカービィに賭ける。」

カービィ「絶対負けない。大食いは僕の大事な特徴。それで負けたらカービィの名前が傷つく。」

ヨッシー「よく言うじゃん。こっちだって伊達に長い舌出して食いまくってる訳じゃないんだよ！」

ほーき雲「よい・・・スタート！」

カービィ・ヨッシー「いくぞ！！」

続
く

限界が知りたい。

ほーき雲「カービィに賭けた人も、ヨッシーに賭けた人も、みんな
で食べ物を戦場に運びましょう。やはり用意した食べ物を全部押し
込めるのは無理でした。」

全員「正直面倒だけどまあいいよ。」

こうして、みんなで大量の食べ物を運んで行く。たぶんみんな同じ
ことを考えているだろう。

『食い過ぎだよ！普段の食事では全然満たされてないわけ！？』

そして、『戦場』に着いたほーき雲達は見た。

食べ物が無くなっている。しかも、両者共に次の食べ物を少しイラ
イラしながら待っている。

ほーき雲「まだ余裕そうですね。」

カービィ「当たり前だよ！」

ヨッシー「早くみんなが持ってきた食べ物ちょうだい！」

ほーき雲「はい。」

テーブルに置いた瞬間、両者共に恐ろしいスピードで食らいついて
いく。

ルイージ「ほーき雲、もうこれで最後だよ。」

ルイージの発言を一切無視し、最後の食べ物も全て食べてしまった。

ほーき雲「これ以上食べ物を用意してないので、『2人で僕に勝った』ということにします。」

こいつらの食事量は計り知れない。

続く

限界が知りたい。（後書き）

タイトル通り、こいつらの食事量の限界が知りたい。

なお、これからこの小説のみ感想返信担当を作ります。（スマブラメンバーじゃないけど・・・）

奇数日 アクセラレータ 一方通行 偶数日 打ち止め（ラストオーダー）

が基本ですが、時々臨時で代役が担当することもあります。その時は後書き欄にちゃんと書きます。ちなみに今日は15日なので今日中に書いた感想は一方通行が返信します。

新登場

ほーき雲「突然ですが、新メンバーの登場です。ただし、知らない人が多いと思うので、簡単に紹介します。」

新メンバーを連れてきたほーき雲。

ほーき雲「また、これより『空き家村グループ』という名前が誕生します。」

リュカ「早く新メンバー呼んでください。」

ほーき雲「新メンバーはこちら、塊魂の王子とイトコハトコとルーキーの皆さんです。」

王子「よろしく。」

エース「面白そうだね。」

変わったキャラクター達がたくさん現れ、スマブラメンバーも注目している。そして中でも注目を浴びていたのがディップである。

ポポ「すごい！あちこちカラフルに光ってるよ！」

ディップ「どうもディップです。よろしく。」

???「ところで皆さんは僕が存在に気づいていますか？」

マスターハンド「わっ！！すぐ隣に透明人間！！」

ジャングル「ジャングルです。僕は透明なのでそこにとよろしく
お願いします。」

ほーき雲「こうしていいメンバー集まったでしょ。他にも特徴的な
キャラクターがたくさんいるからちゃんと交流してみることをおす
めするよ。最後に空き家村グループの意味を説明します。」

突然結成された空き家村グループ。どういう意味があるのか？それ
は次回です。

続く

新登場（後書き）

今日は感想返信はラストオーダーがします。

打ち止め「わーいわーい。ってミサカはミサカは空き家村グループに入りたいと思いいながら喜んでみたり!!」

空き家村

空き家村。

原因は不明だが、五武山市のとある場所にたくさんの家が建てられた。しかし、これらに住む人は1人しかいなかった。その1人がほーき雲である。

ほーき雲が住んでる1件を除いて誰も住んでいなかったため、空き家村と呼ばれている。

そこへ今回、スマブラメンバーをこの空き家村の大量の空き家に住ませることにした。

空き家は確かに減った。しかし、まだたくさん残ってるのが現状。つい先日までほーき雲も50件くらいしかないと思っていたが、実際は数えきれないほどある。

ほーき雲はこの空き家村という名前を消すことが目的で、スマブラメンバーに加え、塊魂のイトコハトコ達も住ませたが、まだまだ空き家は残るのが現状。しかし、今までとは違い、住んでるのは1人ではない。住民は少しずつ増やせば良いだろう。と楽観的に考えられるようになった。空き家村グループとは、空き家村という名前を消すためのグループである。（空き家村という名前が消えた時、グループ名も変える予定らしい。）

ほーき雲「それじゃ、新住民探して来るよ。」

ジュン「いつてらっしゃいほーき雲。」

バンバン「絶対空き家村なんて名前消してやるっね！」

空き家村と呼ばれるエリアを抜けた瞬間、ほーき雲はつぶやいた。

ほーき雲「空き家村という名前もそうだけど、このホールの名前も変えてやりたいよな。」

そこには、ほーき雲がスマブラメンバー達を集合させるために使っているホールがあった。

そして、そこには『境界ホール』と書かれていた。

続く

空き家村（後書き）

次回は、ほーき雲が外出中の時のスマブラメンバー達の生活を送ります。

塊魂キャラクタースマブラ初挑戦

フーミン「炸裂」

フーミン以外「いやいや、全然意味わかんないから!」

フーミン「いゝじゃん」

マリオ「ねえ、塊魂のみんな。スマブラXやってみない?」

王子「やってみたい!」

1回戦

デ IPP 使用キャラ ネス

ミソ 使用キャラ アイススクライマー

オデコ 使用キャラ ヨッシー

イチゴちゃん 使用キャラ ピーチ

エリア マリオサーキット

3個ストック制

スタート!

王子「僕の番はまだなのかな!」

フーミン「まゝまゝ」

王子「なんなんだよお前！」

フーミン「フーミンだけど？」

王子「・・・。」

ディップ「PKフラッシュも当たると強いけど当たりづらい。」

ミソ「ヤバイ！ナナがやられた！！ポポだけじゃかなり不利だ！」

オデコ「なんか虹色のボール取ったら羽生えたよ！」

イチゴちゃん「ギャー！！！」

イチゴちゃん残りストック2

ディップ「なんだ？爆弾箱？遠くからPKサンダー当ててみよう。」

ボカーン！！

ミソ・オデコ「何するんだ！！！」

ミソ・オデコ残りストック2

ディップ「ここ車走ってるから避けるのつらい。」

イチゴちゃん「何これ？Bって書いてあるけど。」

イチゴちゃんはそれを投げた。

イチゴちゃん「あれ？何も起こらないよ。」

ディップ・ミソ・オデコも近寄る。

その時！

ババババババーーーーン！

ルイージ「それはスマートボムの不発弾だね。」

ディップ残りストック2

ミソ・オデコ・イチゴちゃん残りストック1

続きは次回

塊魂キャラクタースマブラ初挑戦（後書き）

打ち止め「感想待ってまーす。ってミサカはミサカは呼びかけてみたり！」

新住民はホームレス

ディップ「虹色のボール取ったぞ！」

ディップ以外「まずい！！」

ディップ「PKスターストーム！！」

ミソ・オデコ・イチゴちゃん残りストック0。よってディップの勝利。

マーシー「2回戦やりたい！」

ビヨンド「あれ？ほーき雲帰ってきた。」

ほーき雲「ただいま。新住民連れてきたよ。」

相原「相原雄介です。よろしくお願いします。」

ほーき雲「ここには空き家がたくさんあるから君も住んでいいんだよ。」

相原「非常に嬉しいです。ついにホームレス脱出できて嬉しいです。」

ほーき雲「どうしても家が欲しいという人なら住んでくれると思うんだ。そうすればお互い嬉しいしね。」

相原「なんかいろいろいますね。」

ほーき雲「こいつらはスマブラメンバーと塊魂のイトコハトコ達。
とにかく面白いやつだらけ。ホームレスのつらさなんて感じさせな
いぞ!」

ニツク「空き家村も勢いがすごくなってきたね。」

ほーき雲「絶対空き家村なんて呼ばせないほどの盛り上がりを見せて
やるんだ!」

???「どこだ・・・裏切り者・・・。」

続く

相原雄介

相原「お願いです。僕がいるのか聞かれたらいないと言ってください。僕は狙われているんです。」

ほーき雲「狙われている？まあ大丈夫だよ。ここには空き家しかない。ここに住んでない人は来ないはず。」

相原「でも、家がたくさんあるとしたら、かくまってると思われる。．．．」

ほーき雲「世間にはここは空き家だらけということになっている。空き家にはかくまってくれる人どころか、かくまってくれない人すらいないんだからな！」

フーミン「僕がいるからな！」

ほーき雲「バカフーミンみたいな面白いやつもいるし。君も空き家村の住民。そして空き家村グループの一員だ！」

相原「ここなら安心して暮らせる気がするよ。ありがとう！」

アクセラレータ
一方通行「おい、ほーき雲！」

ほーき雲「一方通行？まあいいや。遊びに来たんだね。」

ほーき雲は外に出た。

一方通行「遊びにじゃねエ。最近この辺りに危険なやつがいるから

気をつけろって言いに来ただけだ。」

ほーき雲「一方通行って親切なところもあつたんだ。」

一方通行「そこに触れたら殺す。」

ほーき雲「いいや。どうせなら新住民の相原君を家に連れていくのついてくる?」

相原も外に出た。

一方通行「そんなもん行かねえよ。」

その時。

パン!

突然銃が遠くからこちらに撃たれた。

幸い、弾は一方通行に当たり、そのまま反射された。

一方通行「言つたろ。危ねえって。」

相原「もしかして僕を狙ってるやつらかも……。」

続く

相原雄介（後書き）

感想ください。

武装無能力集団（スキルアウト）

一方通行「なア、スキルアウト武装無能力集団って知ってるか？」

ほーき雲「学園都市にいる不良みたいなやつらでしょ。基本的には学園都市にいるわけで、学園都市の外には影響は出ないはずなんだけど。」

一方通行「そのスキルアウトの1つである『新倉団』ってやつらが学園都市の外に出てきたわけだ。」

ほーき雲「でもスキルアウトって学園都市の外に出てきたらただの不良だよな。」

一方通行「そオナンだけどな。新倉団は学園都市の内外共に暴れまわっているかなり大人数の集団、例外中の例外だ。」

ほーき雲は相原が怯えているのを見た。

ほーき雲「もしかしてお前、新倉団に追われているのか？」

相原はうなずいた。

ほーき雲「これで理屈がわかった。なぜ市民の大半が誰も住んでいないと思っている空き家村にわざわざ現れたのか。」

一方通行「そもそも五武山市の人間ですらなかった。それに学園都市は閉鎖的な環境だ。それなら知らなくてもおかしくない。」

ほーき雲「こうなれば余計お前についてきてもらわなきゃ危険だ。僕に戦力はない。頼む。ついてきてくれ。」

一方通行「元々新倉団をどうにかしろって黄泉川よみかわに言われてるンでね。やつらの獲物ならいずれこいつの近くに現れる。行くぞ。」

黄泉川愛穂よみかわあいほ。学園都市の警備員アンチスキルの1人であり、一方通行と打ち止め（ラストオーダー）に住居を提供した人物だ。

ほーき雲「それじゃ、行こう。相原、安心しろ。こいつは強い。新倉団からも守ってくれるよ。」

一方通行「壊すのは得意だが守るのは苦手だぞ。まア新倉団を叩き潰すって考えれば同じだ。」

相原「2人共、ありがとう。」

続く

武装無能力集団（スキルアウト）（後書き）

もう『一方通行』読めますよね？今回は1回も読み仮名書きませんでしたが大丈夫ですよ？

新倉団

スマブラメンバー「俺達も行くぞ！」

ほーき雲「それはありがたいけど、全員で来たら人数多すぎるし、この家も守ってほしいから……。それじゃMOTHERの2人だけついてきて。他の人はこの家の護衛を頼む。」

ネス・リユカ以外「任せとけ！」

こうして、相原を家に案内する。案内するだけならこんなに人はいらないが、スキルアウトの標的となれば話は別である。

ほーき雲「でも、やっぱり謎だな。スキルアウトが学園都市の外に出てくることに何の目的が？」

一方通行「考えられるのは相原とは別に学園都市の外の人間を狙っているか、相原の方が学園都市の外へ出たために追ってきたか。」

相原「確かに僕は自分から学園都市の外に出た。」

一方通行「まだ問題はある。なぜ人数が多いんだ？ざっと見ただけで30人いるな。新倉団の特徴、相原がレベル0であることを考えると10人いれば十分だ。」

ほーき雲「そりゃあ逃げたやつを探すとなれば人数は多ければ多いほど有利だ。」

一方通行「しかし、新倉団のリーダー、新倉はレベル4の人物探索

バイソンサーチャー

の持ち主。相原の居場所は国内なら簡単に探せるだろオナ。まア1度には1人しか探せないがな。」

ほーき雲「待てよ。そしたらスキルアウトの定義はどうするんだよ。スキルアウトとは武装無能力集団。レベル0の不良の集まりだろ。」

一方通行「それが、最近レベル3やレベル4がスキルアウトをまとめることがあって大変なんだアって黄泉川が言ってたぞ。」

ほーき雲「厄介だ・・・。」

続く

新倉団（後書き）

感想ください。

相原を家に連れていった

ほーき雲「ここが君の家だよ。」

相原「襲われなかったみたいでよかったです。」

一方通行「だが、いつ来るかわかんねエぞ。新倉はお前の居場所を知ってるんだからな。」

相原「ホームレスで新倉から逃げるのは大変でした。外で寝るのでいつ見つかったもおかしくない状態で、ろくに寝ることができませんでした。でも、これから安心できます。」

一方通行「安心できる訳ねエだろ。新倉はお前の居場所をつかんでいる。俺が護衛をする。ここに一緒に住んで、いつ新倉が来ても大丈夫なようにする。俺はレベル5第一位だぜ。新倉が来たら絶対潰してやる。」

ほーき雲「一方通行だったらなんとかなるよ。相原、お前も一緒にここで楽しもうぜ。」

相原「僕も楽しんでいいのか？」

ほーき雲「いいんだよ。」

相原「僕だってあの人達と一緒に遊びたい！」

ほーき雲「そうか、じゃあな！明日にでも来いよ！」

相原「それじゃ、よろしくお願いします。一方通行さんですよね？」

一方通行「おオ。よろしくな。」

相原「この部屋の間取りだと・・・。あなたは手前の部屋。僕は奥の部屋で良いですか？」

一方通行「好きにしろ。」

相原「じゃあそうします。何もないと良いですね。」

新倉「うまくいつてるようだな。」

したっぱ「そのようですね。」

新倉「・・・と・・・は絶対に殺す。」

新倉は2人の人物を殺そうとしている。それは誰なのか！？

続く

相原を家に連れていった（後書き）

感想待ってます。

あの日以来、新倉は来なかった（前書き）

スマブラメンバー役目少ないな……。スマブラメンバーを1つの町に凝縮中なのに。

あの日以来、新倉は来なかった

相原が空き家村に住んでから数日がたったが、新倉団は特に何もしてこなかった。あの日を除いては……。

それは相原を家に入れた直後、相原と一方通行と別れて自分の家に帰ろうとしたほーき雲、ネス、リュカ。そこへ新倉団が現れた。

新倉「やあ、早速だが、君達を殺す。」

新倉団は一斉に攻めてきた。

ほーき雲には戦力がない。よって、ネスとリュカが立ち向かう。

リュカ「PKフリーズ！」

あちこちで凍っていく新倉団。

ネス「PKファイヤー！」

一方、燃えているやつらもいた。

新倉「もしかして……あいつらは能力者なのか？」

確かにネスとリュカは超能力を使って戦っている。しかし、ネス達のそれと学園都市のそれは少し違うが、新倉にそれがわかる訳ない。

あっけなく新倉団のしたっぱはやられてしまった。

新倉「今回は逃げるぞ！」

新倉は去っていった。ほーき雲達は追うつもりはなかった。

その後、ほーき雲達はいつものように家に帰り、眠りについた。数日たっても新倉団は相原もそれ以外の誰も襲って来なかった。

続く

あの日以来、新倉は来なかった（後書き）

次回は余りにも新倉が来ないので、みんなで盛り上がります。あと感想待ってます。

ワリオ接待（暴力）ゲーム（前書き）

短いです。

ワリオ接待（暴力）ゲーム

余りにも何も起こらないため、ほーき雲はみんなで盛り上がりうと言いついてきた。

ほーき雲「まずはワリオ接待ゲームね。」

ワリオ以外「そんなのやだ。」

ワリオ「さっさとしろ俺の部下ども。」

ほーき雲「誰が最初にやる？」

当然立候補する者はいない。

ワリオ「言い出しつぺのほーき雲がやれよ。」

ほーき雲「しょうがないなあ。僕の出番だね。」

そう言つて、ほーき雲はワリオを『殴つた』。

ワリオ「おい！何するんだよ！」

ほーき雲「接待＝暴力じゃないの？」

ワリオ「騙された・・・。」

ほーき雲「そもそも本当に接待なんてすると思つたの？そしたら君はフーミン以上にバカだね。」

ワリオ「そもそも俺が何したって言うんだよ！」

ほーき雲「それは殴りながら教えてあげよう。」

続く

ワリオ接待（暴力）ゲーム（後書き）

ワリオが何をしたかなんて想像すれば正解します。

ワリオ（前書き）

24日17時に自動投稿です。この時、作者は学校で部活の大掃除をしていると思います。

ワリオ

ワリオ「俺が何をした!？」

ほーき雲「何も言わなかったけどお前ひどすぎだよ。塊魂のキャラクター呼んだ屁こくし、相原を連れてきたらニンク臭いし。」

ワリオ「だからどうしたってんだ。おならの臭いで文句言っやつは俺が罰を与えてやるよ。」

ほーき雲「お前が罰を受けろー!ー!」

ワリオ「うぎゃああああ!」

ほーき雲「何か言うことは?」

ワリオ「俺は悪くない。前言撤回しろ!」

ほーき雲「どうやらこいつはまだ反省してないようだね。みんな、こいつボコボコにしていよいよ。」

こうしてワリオはボコボコにされました。めでたしめでたし。

続く

ワリオ（後書き）

25～28日までは、作者が旅行中のため、事前に書いたものを毎日17時に自動更新します。ただし28日は早朝に帰宅するため通常投稿になりません。

新住民

ほーき雲「今日は新住民が来るよ。ちなみに女性だよ。」

男達「おおー!!」

ほーき雲「ちなみに名前は鈴科百合子すずしなゆりこっていうんだよ。」

マリオ「鈴科百合子かぁ。美人かなぁ。」

ファルコン「そういえば、相原と一方通行はどうした?」

ほーき雲「今日は集まりたくないから家にいるんだってさ。」

スネーク「新住民いつ来るんだ?」

ほーき雲「もう少しで来ると思うよ。」

女性新住民の登場により盛り上がる男性陣。しかし、このあとんでもないトラブルが発生する・・・。

ほーき雲「(ここまで期待させといて大丈夫かなぁ。)」

リンク「その鈴科百合子はどの作品の人?」

ほーき雲「とある魔術の禁書目録だよ。」

リンク「とある魔術の禁書目録だったら御坂美琴がよかったなぁ。」

マリオ「俺はインデックス派だな。」

ほーき雲「君達の好みは聞いてないし、来るのは鈴科しか来ないし。」

リンク「俺は鈴科なんてやつ知らねえよ。」

ほーき雲「知らない方が良いじゃん。可愛いかな？とか、俺に惚れるかな？とかってドキドキするでしょ？」

マリオ「最初から可愛いってわかってる方がいい。」

その時、ドアをノックする音がした。

ほーき雲「お待ちかね。新住民の鈴科百合子が来ましたよ。誰かドア開けに行ってきて。」

男性陣「俺が行くんだああああー！！！」

鈴科百合子がどんな人なのか知りたい男性陣は我先に玄関へ向かって行く。

鈴科百合子の登場は次回に持ち越しです。

続く

新住民（後書き）

鈴科百合子、暇があれば調べてみてください。どんな人かわかりますよ。

鈴科百合子

ファルコン「これが・・・鈴科百合子？」

マリオ「イメージと違う・・・。」

フォックス「おい、ほーき雲！お前このこと知ってただろ！」

ほーき雲「え？何のことかな？」

フォックス「とぼけるな！この鈴・・・」

までしゃべった瞬間、何かに頭をつかまれていることに気づいた。

フォックスが振り返ると・・・。

鈴科「あアン？俺がどオかしたかア？」

スネーク「しかも一人称俺だし・・・。」

そこには、女装した一方通行の姿があった。

ファルコ「おい一方通行、女装したのに口調がいつものままだや意味ないだろ。口調も少し女っぽくした方が・・・。」

鈴科「あアン？俺は鈴科百合子だ。一方通行なんて名前じゃねエ。」

マリオ「こりゃ一方通行に直接問いただしてみようぜ。」

ほーき雲「相原と一方通行は今日には家にいるらしいよ。」

男達「よし、一方通行覚悟しろよ!」

続く

鈴科百合子（後書き）

ちなみに鈴科百合子はオリキャラではありません。

相原宅強制訪問

鈴科「でさア、その一方通行ってやつのところ行ってなんになるんだ？」

ほーき雲「本当に別人なのか確かめる。もし本当に別人だったら二人で並んでもらってどのくらい似てるか調べる。」

マリオ「これで同一人物だったらただじゃ済まさないぜ。」

鈴科「だから別人だって言ってンじゃねエか。」

全員は相原と一方通行の家に着いた。

ほーき雲「よし、確かめに行くぞ。」

ほーき雲はドアをノックする。しかし、反応がない。仕方なく、勝手に入った。

ほーき雲「なんだよこれ……。」

一方通行が、あの学園都市最強のレベル5が、倒れていた。

ほーき雲「おい、一方通行!!」

一方通行「ン……。」

ほーき雲「まだ意識はあるのか！？どうしたんだ！？」

一方通行「イマジン・・・ブレイカー・・・。」

ほーき雲「幻想殺し（イマジンブレイカー）！？どういことだよ・・・。」

まさか、あの少年が関わっているのだろうか。

続く

相原宅強制訪問（後書き）

感想ください。

第24学区（前書き）

これから先、話題があっちこっち行くのでついてきてください。

第24学区

幻想殺し（イマジンプレイカー）といえば上条当麻のことを言う。

右手で触れた異能力を打ち消す。それは一方通行のベクトル変換も例外ではなく、絶対能力進化計画が凍結するきっかけになった。

しかし、今回の事件をどうやって彼に関係させるのかわからないというのが今の状況。上条当麻が何の理由も無しに人をこんな状態にするはずがない。

ならば、なぜ一方通行が幻想殺しという言葉を口にしたのだろうか。

一旦、五武山市から離れ、学園都市で起きた新倉団の関わっている事件に視線を向ける。

ジャッジメント
風紀委員の白井黒子は学園都市の第24学区に来ていた。

黒子「こんなところがあったんですね・・・。」

ちなみに、学園都市の学区は23しかないはずである。この第24学区は上層部でも知らない怪しい空間だ。

???「助けてください!」

黒子「あなたたちは？」

白井黒子が見たのは2人の子供。置き去り（チャイルドエラー）だろつと推理する黒子。

???「おつ、あなたはいい実験台ですね。」

そしてその後ろから謎の人影があつた。

続く

強制進化

五武山市サイド

ほーき雲「相原がいないぞ！どうしたんだ！？」

一方通行「相原が……や……た……た……」

ほーき雲「相原がやられたのか。今になって動いたか新倉め！」

メタナイト「ちょっと待て。」

ほーき雲「どうした？」

メタナイト「それじゃあなぜ幻想殺しが関わっているんだ？あの少年は無能力者だがスキルアウトになるようなやつじゃない。そこまです説明できるか一方通行。」

一方通行「相原が……」

ほーき雲「相原がどうした！？」

一方通行「ぐあア！！」

ほーき雲「やっぱり無理そうだな。」

????「結局、私の出番って訳よ。」

全員「誰だ！？」

フレンド「私はフレンド」セイヴェルン。相手が幻想殺しなら私が
そいつの相手をするって訳よ。」

ほーき雲「ここでフレンドか。僕も知っているけど、まだ上条が敵
って訳じゃないよ。」

幻想殺しがどう関わるのか、その情報はまだわからないようだ。

学園都市第24学区サイド

黒子「実験!？」

「???」そう、実験。詳しく言えば能力の強制進化だよ。」

黒子はすごい力が自分にかかっていることに気づいた。

黒子「!！」

そして、謎の男にとらえられた3人目を見つけてしまった。

黒子「みんな、3人そろってにげて!!！」

「????」私はあなたが超心配です。」

黒子「いいから!！」

黒子は3人に触れていく。そして全員テレポートされた。ただ、3人共どこへ行ったのかわからない。とにかくかなり遠くまで飛ばしてしまったようだ。能力進化によって遠くまで飛ばしたが、それを意識できるほど体はついていかなかった。

黒子「こうなれば……。」

黒子は最大限の力を使って自分自身をテレポートさせる。

なんとか逃げることに成功した。しかし、ここがどこなのか全然わからない。

黒子「感覚は……戻ってますね。ならばここがどこなのかかわかれば帰れますね……。」

続く

強制進化（後書き）

怪しい研究者は今後出てこない可能性があります。

裏切りの相原

フレンド「戦う前にサバ缶食べたい。」

ほーき雲「サバ缶はここには無いよ。」

フレンド「自分で持ってきた。これから開けるから気をつけて。」

フレンドはライターと怪しい物体を取り出した。

ほーき雲「みんな、離れた方がいいよ。」

スマブラメンバー「なんで？」

次の瞬間

ポカーン！！

いきなり怪しい物体が爆発した。

ほーき雲「あれは爆弾だよ。フレンドはサバ缶を爆破して開けるんだ。どうやら缶切りが使えないみたい。」

ほーき雲とフレンド以外「缶切り使えよー！！」

フレンド「結局サバ缶最高って訳よ。」

フレンド以外「……。」

しばらくして

フレンド「さあ行こう！」

ほーき雲「フレンドがサバ缶食ってる間いづらかった。」

フレンド「しかし敵はどこだろうね？」

その時、

新倉「おっ？現れたなスマブラメンバーども。」

ほーき雲「そっちこそ、自分から現れるとはそうとう負けたいみたいだな。相原は返してもらう。もちろんお前も潰す！」

一方通行「じゃあ早速やられてもらおうか三下ア！！」

一方通行は脚力のベクトルを倍増させて新倉に飛びかかるうとした。しかし、一方通行は自分の能力を使う前に何者かに押さえられた。

バギン！という音がしたため、一方通行は後ろを向く。そこには相原の姿があった。

相原「散々殴ったのに、さすがレベル5。しぶといね。」

一方通行「ッ!!」

相原は一方通行を殴った。相原、一方通行、新倉団以外の誰もが驚いた。

ほーき雲「相原、お前何やってんだよ……。」

相原「え? 『敵』を殴ってるだけだけど?」

続く

裏切りの相原（後書き）

感想ください。

新倉団が動く理由

相原「僕は『幻想殺し』を持っているんだ。どっかの上条ってやつと同じだよ。」

一方通行「ッ!!」

つまり、上条当麻に負けた者が相原に勝てる可能性は低い。それより気になることがあった。

ほーき雲「お前は敵なのか？」

相原「そうだよ。新倉団のサブリーダーだ。」

ほーき雲「じゃあなぜここに？」

相原「狙いはお前だよ。」

あっさり告げられた。『新倉団はほーき雲を狙っている』と。

ほーき雲「何のために！？僕はただここで楽しく生活をしているだけなのに！」

相原「レベル5の、しかも学園都市最強を味方につけたお前が言うセリフか？おまけに変な世界から変わったやつらを連れてきたりよお。おかげでお前はあちこちから危険視されてるんだよ！」

相原がほーき雲に向かって言葉をぶつける。それに対してほーき雲はあっさり発言する。

ほーき雲「1つ警告。後ろも見ろよ。」

新倉団がそろって後ろを向くと、そこには2・5mくらいの謎の物体がこちらに向かって転がって来ていた。しかも、その物体にはたくさんの『モノ』がくっついていた。

新倉「なんじゃありやああああー！！！！！！！！！！」

続く

新倉団が動く理由（後書き）

転がってきた物体の正体。わかる人にはわかります。

連載30話記念、そして大晦日記念として新倉には星になってもらおう(前書き)

とんでもないタイトルだ・・・。

連載30話記念、そして大晦日記念として新倉には星になってもらう

ほーき雲「あ、あれは……。」

コロコロコロコロ……。

王子「やあ、新倉団なんて巻き込んでやるよ!」

全員「塊だあああああ——!!!!」

新倉「ちよつと待て、やめろって!このままじゃ巻き込まれる!!」

ほーき雲「負けを認める。新倉。そしてみんなそろって星になれ。」

新倉「それ死ねってことか!」

ほーき雲「いや、死ぬんじゃなくて本当に星になれ。本物の星になつて夜空に浮かべ。」

新倉「本気か!」

ほーき雲「王様に頼めばたぶん本気。」

新倉「ぎゃあああああ——!!!!」

ほーき雲「さようなら」

全員「魔の音符だ・・・。」

魔の音符とは裏の感情丸出しの ことである。これをつけた発言を向けられたら死ぬかそれと同等の何かを食らう。それ以外にも魔の星、魔の流れ星などがあるが、意味は同じ。

そんなこんなで、新倉団は1人残らず巻き込んでしまった。

王様「コレ星ニスルノ？」

ほーき雲「お願いします。」

王様「エイッ！」

こうして、新倉惑星が誕生した。めでたしめでたし。

その時、ほーき雲は1人の少女を見つけた。

???「私超住む場所がありません。どうかしてくれませんか？」

ほーき雲「あつ、まさか・・・。」

この新登場人物が次の物語の始まりだった。

続く

連載30話記念、そして大晦日記念として新倉には星になってもらおう（後書き）

次回から新章スタートです。さらに作者が大好きなキャラクターが登場します。

番外編、初詣（前書き）

本編はいったん置いて、今日は元日なので初詣をやりたいと思います。ちなみに参加したのはスマブラメンバーとある魔術の禁書目録の一部のキャラクターです。ストーリー進行状況は関係ありません。

番外編、初詣

ほーき雲「初詣行くの遠かった……。」

五武山市には神社は1ヶ所しかない。それは空き家村とは間逆の場所にある。結果として、全員初詣に行くだけで時間がかかる。

ほーき雲「それではみんなお願いしよう！」

美琴「（懸賞のゲコ太ストラップが欲しい）」

当麻「またゲコ太ストラップかよ。」

美琴「うるさいわねー！」

いきなりビリビリを食らわせる御坂美琴。上条当麻は右手で受け止める。こういうことを毎日のようにやっている。

美琴「次はアンタよ。」

当麻「（幸せになりたいです。せめて『不幸だー！！』って言う回数を7割くらいにしたい。）」

ほーき雲「さすが『THE 不幸』こと上条当麻。」

当麻「だってもう不幸は嫌なんだよー！」

ほーき雲「そうそう、しばらくしたら不幸バトルとかする？他の作者さんから不幸なキャラクター募集して誰が1番不幸か競うんだけ

ど……。」

当麻「それ勝てそうだけど勝っていいの？」

ほーき雲「そこは微妙なところ。さて、次は誰かな？」

ワリオ「（扱いが良くなりますように。）」

マリオ・ルイージ「（ルイージ（兄さん）よりもいい役になりたい
！！）」

ほーき雲「（永久にルイージがいい役だと思っけどな……。）」

王子「（特大の塊を転がしたい。）」

などいろいろありました。

次回から本編スタートです。

番外編、初詣（後書き）

不幸バトルはしばらくしたらやります。なので不幸なキャラクターを募集します。またあとで活動報告も書きます。

絹旗新登場!! (前書き)

今日は3DSでダウンロードした体験版ゲームにはまって更新が遅くなりました。すみません。

絹旗新登場！！

ほーき雲「まさか・・・絹旗最愛？」

絹旗「超そうですよ。」

ほーき雲「やっぱり絹旗だ。」

一方通行「どオしたんだ？」

ほーき雲「以前大覇星祭行ったときに出会ったんだよ。」

一方通行「へエ・・・。」

絹旗「今でもやっぱり超ほーき雲なんですネ。」

ほーき雲「それで、空き家村に住みたいのね。じゃあ僕の家のお隣が空いてるからそこで良いね？」

絹旗「超OKです。」

ワリオ「ちよつと待て！お前の家の隣空いてたのかよ！じゃあなんで俺はすごく遠いところになってるんだ！？みんなのところ行くの大変なんだぞ！！」

ほーき雲「誰でも考えりゃわかる話だろ。僕は君は嫌いなんだよ倭痢汚くん。」

倭痢汚「お前のオリジナルワリオ作るな！他の小説でもこんな役な

のに。」

ほーき雲「おい倅汚、そもそもお前はそういう役なの！それは全世界共通なの！」

倅汚「俺の居場所はどこなんだよ！！」

ほーき雲「第10学区辺りかな？」

倅汚「第10学区って少年院とか墓地とかがある第10学区？」

ほーき雲「それ以外に何があるの？」

倅汚「・・・。」

ほーき雲「というわけで楽しい生活の始まりだぜ！！（倅汚以外ね。）」

続く

絹旗新登場!! (後書き)

次回は絹旗たくさん出ます!!

絹旗歓迎パーティ（前書き）

本日もぷよぷよの体験版にはまっています。しかし今日はさっさと更新してその後ぷよぷよを楽しむことにします。

以下はぷよぷよを知ってる方のみ読んでみてください。知らない方が読んでも良いですがわかりますかね・・・。

僕はこの体験版しかやったことありません。ただ、だいたいわかってきたので良かったです。

りんごっていうキャラクター強すぎです。ラフィーナで戦っても勝てるかどうか・・・。

大量に降ってくる邪魔ぷよに耐えられません。ばたんきゅん。

ちなみに体験版なのでキャラクターは4人しか使えません。ばたんきゅん。

前書きたくさん書きすぎました。ばたんきゅん。

絹旗歓迎パーティ

ほーき雲「絹旗が来てくれるなんて嬉しい限りだよ。」

リアルほーき雲も絹旗大好きです。

その頃絹旗は・・・。

絹旗「あなたたちの存在は超秘密ですからね。」

???「大丈夫、ほーき雲がここに来る確率10%にしておいたからね。」

絹旗「超0%にはできないんですか?」

???「0%ができたら僕はレベル4ですよ。できないからレベル3なんです。」

???「私もレベル3だけど一応紫を偵察させてるから大丈夫。」

絹旗「あれ超目立ちませんか?」

????「まあまあ。」

ほーき雲サイド

ほーき雲「絹旗、みんなと一緒に集まるから出てきて！」

確率を低くしたところで絹旗大好きなほーき雲が現れない訳がなかった。

絹旗「はーい。」

ほーき雲「今日は絹旗最愛歓迎パーティをやるんだよ。主役だからね。」

絹旗「パーティの超主役ですか・・・。」

そしてパーティ会場。（空き家村の一番端にあつて、少し外にはみ出ているマスターハンド（今は空き家村にはいない。）管理の謎のホール。）

ほーき雲「絹旗さん、ようこそ空き家村へ！ここは空き家の密集地帯、だけど絶対住民増やしてやるんだ！」

絹旗「超よろしくお願いします。絹旗最愛です。趣味はC級映画鑑賞です。それもハリウッド狙って作ったのに最終的にC級になっちゃった超天然系のやつ。」

ほーき雲「それじゃあ食って騒げのパーティの始まりだぜ！！」

絹旗「食べ物ならあの人達がさっさと食べて超なくなっただけ
ど。」

そう言って、絹旗はピンク球と緑の恐竜を指差す。

カービー& amp・ヨッシー「あはは。」

続く

絹旗歓迎パーティ（後書き）

感想ください。

新住民ラッシュ？（前書き）

今日は部活があったので忙しくて更新遅れました。

新住民ラッシュ？

絹旗「住民を集めているならば、人は超多い方がいいですか？」

ほーき雲「確かに多い方がいいね。新住民紹介してくれるの？」

絹旗「と言っても2人だけですけどね。」

ほーき雲「もしかして能力者だったりする？」

絹旗「はい、2人共レベル3です。」

ほーき雲「それじゃ、会いに行こう！」

その2人の能力者に会った時に変な物を見た。何か紫色の物体が動いていた。

????「あつ、驚かせちゃったね。それは私の能力で作り出した物体なんだ。『ソフトコントロール柔物操作』。それが私の能力だよ。」

絹旗「あれ？水本、なんで超外出してるんですか！？」

水本「だって山野が外出して危ない目に会う確率を10%にしたって言っただもん。」

絹旗「あつ、超山野！勝手に自分の能力使って外出するな！」

山野「だって、確率低くしたら大丈夫なはずでしょ。」

新住民は水本と山野。水本は女で、山野は男。どちらも小6か中1くらいだ。ほーき雲は目の前の光景を見ながら感じた。

絹旗「こいつらが新住民、山野良太と水本彩奈。山野の能力が確率を自由に変えられる『パーセンテージ確率変化』で、水本の能力がカラフルな柔軟物体を作り出す『ソフトコントロール柔物操作』です。」

水本「私の作る物体には特性があつて、赤は粘着力が良いがベチヨつとしている。青は弾力性に優れているが発射最大スピードが遅い。緑はハイスピードで飛ばせるけど少し硬め。黄色は攻撃力が高いけど連射はできない。紫は唯一自分の力で動けるけど融通が聞かないことが多い。こんな感じかな。」

ほーき雲「じゃああの黄色い帽子かぶっているやつに赤をぶつけてやって。」

水本「えいつ!」

ワリオ風の人「うわっ、顔直撃だぞ!あとお正月の格 けチエックみたいに書くなよ!」

ほーき雲「やっぱりお前映す資格無し。(笑)」

ワリオは消えました。

続く

新住民ラッシュ？（後書き）

感想ください。

大乱闘開始の少し前

ほーき雲「暇だし、大乱闘でもしない？」

スマブラメンバー「いえーい！」

ほーき雲「ルールとして、負けたらあの赤いゲートに入ってもらってからね。」

全員が見た方向には、いかにも怪しげなゲートがあった。

全員「よく道のと真ん中にこんなゲート作ったよな・・・。」

ほーき雲「ここは空き家村だからね。基本的に僕達以外はこの道を通らない。だから大乱闘やつてもやや大丈夫なわけ。」

全員が納得したあとほーき雲が続けて言う。

ほーき雲「面倒だから適当に名前呼ぶよ。じゃあまず一方通行VSワリオVSヨッシーVSカービィね。」

全員「（殺りたいやつを一方通行とバトルさせれば絶対負けるってことか。カービィとヨッシーはパーティの食べ物全部食べたからな）」

ほーき雲「1位じゃなければ赤いゲート行きね。じゃあスタート！」

ワリオ・カービィ・ヨッシー「無理無理!!」

ほーき雲「がんばれ！勝てばいいんだよ。」

続く

大乱闘開始の少し前（後書き）

一方通行に勝てば怪しい赤いゲートを通らなくてすむ！（無理だと思っけど・・・。）

吸い込んだら吹き飛ぶ

一方通行「かかってきなア三下ア！」

ワリオ「お前が死ねええー！」

真っ先に一方通行にとびかかったのはワリオだ。

当然だがワリオの攻撃は当たらない。全て反射している。

ヨッシー「一方通行と戦うのに集中しているワリオをやっつけよう！」

ヨッシーがワリオの場所に着いた時、すでにワリオは一方通行の攻撃で倒されていた。

一方通行「次はお前かア？」

ヨッシー「ッ!!」

一方通行は1発殴っただけ。しかしベクトル4倍にしているため、威力も4倍である。

一方通行「学園都市最強の俺を倒そうなんて甘い考えなんだよ。」

残ったのは一方通行とカービィ。

カービィ「（一方通行、強い……。もし、コピーできたら立ち向かえるかな。）」

カービィは吸い込みを始めた。しかし、それで一方通行を倒せるはずがない。

一方通行「フン、吸い込むだけかよ。そんなんで俺に勝てる訳が・・。
」

吸い込むだけでは一方通行は倒せないと思った次の瞬間！

一方通行「何ッ!？」

一方通行が『カービィと逆の方向に吹き飛んだ』。

ほーき雲「そういうことか。」

全員「どういうこと?」

ほーき雲「いいかい、一方通行はあらゆるベクトルを『反射』する。でも、言ってしまうえばそれだけなんだよ。」

全員「あっ・・・。」

ほーき雲「そう、カービィは一方通行を吸い込もうとした。つまり一方通行からカービィの方向にベクトルが働いたことになる。それを『反射』したから、一方通行はカービィと逆の方向に吹き飛んだわけ。」

一方通行は何回もカービィにとびかかる。しかし、カービィは『吸い込む』という攻撃で一方通行を『吹き飛ばして』いく。

結局、勝ったのはカービィだった。

ほーき雲「それじゃ、負けた3人は赤いゲート入ってね。」

3人「嫌だ……。」

続く

吸い込んだら吹き飛ぶ（後書き）

感想ください。

罰ゲームタイム（前書き）

今日は学校で居残りしました。理由はお察しください。（笑）

罰ゲームタイム

ほーき雲「じゃあ、まず最初に負けたワリオから。」

ワリオ「いかにもヤバそう……。」

ワリオが通ると……。

ワリオ「ふぎゃー!!」

おもりが降ってきた。

全員おもりの重さを確かめてみた。

『8・17t』

全員「半端……。そんな半端なおもりどこにあるんだよ。」

ほーき雲「これ用におもり作ってくれて頼んだらそいつ不器用で……。」

とある処罰の緑色恐竜でっかい「とある処罰の緑色恐竜でっかいって何だよ!!」

ヨッシーが通ると……。

ヨッシー「ふぎゃー!!」

ほーき雲「あつ、これ8・17もオンリーになってる。設定変えて・
・つと。じゃあもう一回頼むね。」

とある処罰の緑色恐竜どくろい「なんで2回受けるんだああああー！！
！！」

ヨッシー以外「とある処罰の緑色恐竜になつてるところはつま
ないんだ・・・。」

たぶん余裕が無いのだろう。

ヨッシー「なんだ・・・？」

そしてヨッシーは倒れた。

ほーき雲「あ、それは僕がチャットで飲んで倒れたことがあるダー
クマタードリンク。」

一方通行「次俺の番かよ・・・。」

ほーき雲「行け！」

一方通行「まア、俺は何がこようと反射するだけだけだな。」

安心したのもつかの間だった。

一方通行「ッ！！」

ほーき雲「今度はチャットのダークマタードリンクの他に垣根帝督
が作ったオリジナル未元物質ダークマターを混ぜたやつ。垣根帝督のダークマタ

「はチャットのダークマターと違って『この世に無い物質を作り出している』から反射は効かないんだと思うよ。もっとも、そのダークマターも含めて再演算すれば大丈夫だけど。」

こうして3人は地獄を味わいました。

続く

罰ゲームタイム（後書き）

10日から学校のウィンターキャンプで長野にスキーに行くので13日まで毎日17時に予約投稿となります。

甘いものを配るいかにも怪しい男はほっとして2回戦の参加者紹介（前書き）

逃走中は録画中です。

甘いものを配るいかにも怪しい男はほっとして2回戦の参加者紹介

???「ちよつと、甘い物を受け取ってくれないかな？」

ほーき雲「??」

子供達「わー!!」

ほーき雲「おいおいおいちよつと待てー!!」

???「じゃあね。」

こうして謎の男は去ってった。

ほーき雲「いかにも怪しいやつだったけどなあ。なんだよあれ。表が深緑で、裏が黄色って。……。まあいなくなったから2回戦行こうか!2回戦は絹旗最愛VSフレンドVSマリオVSクッパだよ。」

絹旗「フレンドさん。同じ『アイテム』の人間だからって容赦しませんよ。」

マリオ「クッパくん。スーパーマリオシリーズではいつも負けてるけど勝てるのかなあ。」

クッパ「あれは城にあるスイッチのおかげだろ。あれが無かったら何もできない癖に。」

ほーき雲「皆さん本気ですね。では、スタート!!」

五武山市のどこかで

??? A r 「また異世界に飛ばされたんだね。」

??? A p 「怪しい実験はやめた方がいいって言いましたよね?」

??? R i 「すみませんでした。」

??? A m 「確かそれで実際の部室爆破させたって??? A p から聞いたよ。」

??? S h 「あの甘党の??? R eはどこへ行ったんだ。まあそれよりも今日こそ??? A rを手に入れる。」

??? A r 「また Hentai みたいなことを・・・。」

??? S h 「Hentai ってい・う・な!!俺は??? A r の魔力が欲しいだけだ!!」

こいつらは魔術サイドの人間なのか?

続く

甘いものを配るいかにも怪しい男はほっとして2回戦の参加者紹介（後書き）

五武山市に飛ばされた人達はもっと人数います。セリフが無いだけ。
（笑）

2回戦

第2回戦スタート

クツパ「まずはマリオを倒してやる!!」

クツパが動き出すが・・・。

ボカーン

クツパ「なんだなんだ!？」

フレンド「まさか3秒で引つかかるとは。」

クツパ「……………。（戦闘不能）」

クツパ脱落

ほーき雲「フレンドが爆弾仕掛けてたね。」

絹旗「フレンド、それは超自滅行為ですよ。だってクツパが脱落したらマリオが私達を攻撃してくるんですよ。」

フレンド「結局、最終的にはそうなる訳よ。」

マリオ「そうだな。クッパがやられたなら次の標的はお前らになるぞ。」

フレンド「えいつ。」

マリオ「ッ！！？」

ボカーン

マリオ脱落

ほーき雲「マリオ弱っ！」

そういうことを言っているうちに絹旗は倒れているクッパを片手で持ち上げた。

実際には手から薄い窒素の膜が出ている。これが絹旗の能力『窒素スーマー装甲』だ。

絹旗「そらっ！」

クッパを投げる絹旗最愛。ただ、2人とも実際はただの中学生くらいの少女であり、クッパに潰されて耐えられず、フレンド脱落。勝者は絹旗最愛。

絹旗「超楽勝でしたね。」

ほーき雲「はい3人罰ゲーム。」

3人「やだあ。」

続く

2 回戦（後書き）

感想ください。

罰ゲーム2

ほーき雲「じゃあまずフレンダから。」

フレンダが通ると・・・。

ベチヨ！

フレンダ「きゃっ、何これ！？赤くてベチヨっとしてるよ。」

ほーき雲「それは水本彩奈の能力で作った物体の赤バージョン。ベチヨっとしていて粘着力が強いのが特徴。まあ4時間経てば消えるから。」

フレンダ「4時間も待てないって訳よ！」

ほーき雲「次はマリオ。」

マリオ「何でもかかって来い！」

ベチヨ！

マリオ「って泥かよ！！なんかどんどん雑になってない!？」

ほーき雲「気のせい。続いてトリのクツパ。」

クツパ「やだあ。（鳥はファルコだろ・・・。）」

鳥「こらこら！！小声で何言ってるんだよ!!！」

意味を間違えているのか、ただのボケなのかは不明。そして・・・。

ガガガガガガガガガボチャー

クッパ「熱っ!!」

ほーき雲「いつものマリオゲームでおなじみのクッパの倒し方。そんなじゃ3回戦行こうかな」。

クッパ「俺は無視かあああーーーー!!!」

2話前に現れた怪しいやつらは空き家村に足を踏み入れていた。

「??? Ar」ここら辺全然人がいないっぽい。家はたくさんあるのにね。」

「??? Am」なんか静かだね。」

「??? St」ここに新しく??? Arとの新婚スイートホームを・・・。」

「??? Ar」だからボクは??? Stとは結婚しないって言うてるでしょ。このバカ??? St!!」

「??? A c 「あれ?、??? F eさんと??? K rさんもいなくなりましたよ。」

「??? R a 「大丈夫ですよ先生。あの2人は??? R eを追っただけですから。」

続く

罰ゲーム2（後書き）

こいつらの正体はわかる人にはわかります。次回スマブラメンバー達とぶつかります。

次回も17時投稿です。

乱入者

ほーき雲「続いて3回戦。ルイージVSファルコVSソニックVS・
・・。」

??? Ra「私も参加させてもらえないかしら?」

ほーき雲「なんなんだ!?!」

ラフィーナ「私はラフィーナ。最強の格闘女王ですわ!」

??? Rr「ちよつと何よ!私をさしおいてそんなことを・・・。
私が最強なのよ!」

ほーき雲「(面倒なのが来たな・・・。)名前は?」

ルルー「ルルーです。」

ほーき雲「それじゃあラフィーナVSファルコVSソニックVSル
ルーで行こう!」

ルイージ「(やった。これで罰ゲームの心配が無い。)」

ほーき雲「よいい、スタート!」

??? Ar「なんか戦い始めちゃったね。」

??? Sh「(しかしどうすれば??? Arを手に入れられるんだ
?)」

「??? Ar」またヘンタイ発言・・・。

「??? Sh」ヘンタイって言うな!!」

続く

乱入者（後書き）

感想ください。

謎の魔術師

ラフィーナ「行くわよ!!」

スピードをあげて動き出したラフィーナ。他の3人もそれなりにスピードが出せるため、ほとんど戦闘状況がわからない状態となっている。

ラフィーナ「シエルアーク虹弧!!」

ソニック「うりゃあ!!」

叫びを聞くくらいしか状況判断手段が無い。その中、脱落者が出た。

ルルー「このスピードにはついていけない……。」

ラフィーナ「(それで最強を名乗るのは281年早いすわ!!)」

心に思うことはできるが、声に出すことはほぼ不可能。これはスピード戦だからだ。しかも半端……。

そんな中、ほーき雲の近くで誰かがつぶやいた。

インデックス「あの人、魔術師？」

ほーき雲「っていつの間にインデックス!？」

インデックス「あの紫色の髪の人から魔力を感じる。いや、それ以外にもあっちで見えている人達にも魔力を感じる。戦っている人の属

性は拳、あの剣士は闇だね。あとあの青と白の服にオレンジの髪の人。あの人の属性は火だったり氷だったり、よくわからない。私の10万3000冊の魔導書を使っても全員よくわからない。」

ほーき雲「つまり、あいつらは突然現れた謎の魔術師ってことなの？」

続く

謎の魔術師（後書き）

感想ください。

上条当麻×アルル・ナジャ（前書き）

ウィンターキャンプから帰って来ました。今日は自力投稿です。

上条当麻×アルル・ナジャ

インデックスの言葉を聞いた??? Arは発言した。

??? Ar「ボク達は魔術師じゃなくて魔導師。どっちも魔力はあるんだけどね。」

その時、大乱闘の決着が着いた。

ソニック「俺が勝ったぜ!」

ラフィーナ「けっこうスピードありますわね・・・。」

ほーき雲「ここでストップ。番外戦を開始するよ。この・・・君誰?」

??? Ar「ボクはアルル・ナジャっていうんだ。」

ほーき雲「そのアルル・ナジャと戦う人誰かいらないかな?」

水本「私相手したい!私の柔物操作で戦^{ソフトコントロール}ってあげる!」

ここで、少し時間をさかのぼります。

アルル「うわあ!」

当麻「わっ!」

アルル・ナジャと上条当麻が曲がり角でぶつかった。その時だった。
バキン！という音がした。

当麻「（えっどどういうことだ？）あ．．．すみませんでした。」

アルル「いえいえ．．．。（さっきの音は何？）」

そして、2人は別れていった。

当麻「なんで俺の右手が反応したんだ？．．．ってあれ？インデックス！？」

その頃インデックスは．．．。

インデックス「何か魔力を感じた。何かあるよあの人。」

こうしてこの話の最初に至る。さらにこの出来事がこの後を左右する。

続く

上条当麻×アルル・ナジャ（後書き）

感想ください。

ぶよぶよキャラ登場（前書き）

・・・ってもっと前からいたか。
（笑）

ぷよぷよキャラ登場

水本「ちよつと無理してみようかな。」

水本彩奈は連射能力が劣っている黄色物体を4発撃った。黄色は攻撃力が高いため、戦闘に使いたいのだ。

黄色物体がアルルに向かって飛んでいく。そこでアルルは叫んだ。

アルル「ぷよ!？」

アルルは4つの黄色物体を1つにまとめる。

アルル「これで消えるはず!」

水本「??」

当然だが、黄色物体は消えなかった。

アルル「おかしいな。ぷよを4つくっつけたのに消えないよ。」

水本「ねえねえ。ぷよって何?」

アルル「ぷよって・・・だからそれ・・・。」

水本「これは私が作り出した物体。ぷよなんて名前は無いよ。」

アルル「この世界にぷよは無いの!？」

ほーき雲「そういうことか。君達『ぶよぶよ』のキャラクターだったんだね。」

アルル「やっぱり異世界なの!？」

??? Ap「先輩、どうしてくれるんですか!」

??? Ri「・・・。」

ほーき雲「君はりんごで、君はりすくませんぱいだね。」

りんご(??? Ap)「そうですけど・・・。」

りすくませんぱい(??? Ri)「実験大失敗だ。」

ほーき雲「とにかくここは五武山市の空き家村だよ。もしよかったらここに住まない?」

アルル「じゃあ、そうしようかな。」

アコール先生「ところで、サタンさん、レムレスさん、クルークさん、フェーリさんはどうします?」

ぶよぶよメンバー「あ・・・。」

続く

ぶよぶよキャラ登場（後書き）

レムレスとクルークとフェーリがどこかへ行ったというのは知っていたが、サタンまでいなくなるとは心配だ・・・。

サタンはまた変なことしそうだから。（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2698z/>

スマブラメンバーを1つの町に凝縮中

2012年1月14日18時48分発行